

青山閑話

完

289.1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

タイトル番号：0079

書名：青山閑話

1冊

青山閑話

完

Handwritten notes in the top right section, including characters like 山, 閑, 話, and 完.

山

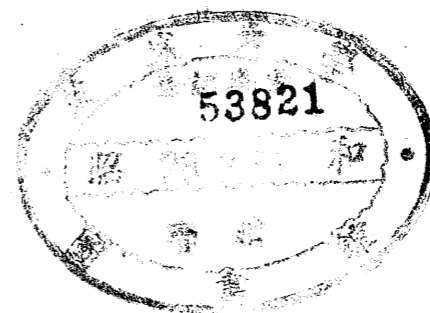
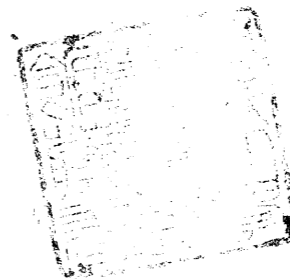
閑

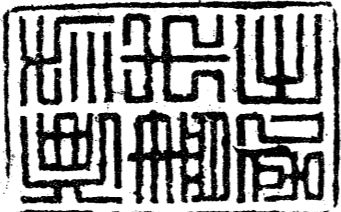
話

完

山

Additional handwritten characters at the bottom of the page, including 山, 閑, 話, and 完.





青山園法



之松弾尖弼治憲公

廣山と号す河原井及後松守
中巻を元徳院殿とす

和井平仙を清言信也

河一代の流蹟ハ皆く木下と存ハ林平仙玉妻の大妹ハ名有平守

也て少成先人可其意祖を母也式部大輔也長谷穂の後裔同門

國初丹波位之及後數十代小権身之とす尾也平仙之孫也

と有之ハの孫を嘉十平と号す保正三年八月廿日乙三平を生じ

名徳氏字の世孫生す也平仙と号す又ぬ素山人と稱す平仙幼少

より學問を好み京師水邊學の後同玉竹隱之孫也及子徳元

淡園 淡園本姓福尾竹隱氏の輩中西氏の
名手と有る名蹟寧寧文部侍郎太中 中後之業を交年乙三平

京師水邊學一十にして長崎水邊の華音を學び長崎の八木川

たつりし其後汝係松留の我家の左京大夫殿の七女あり
其親の黄蘗の春僧江戶出づり此對談の厚きより戸
通事の役を承る。佃丹志三郎より此の侯町に居住しを譯
學の事として相尋ねしに一庄の通判をいふ事なき事あり
因にて汝牙之言信がたより諺歌などおの兼て扶杖を
と申す。一に比上校璋の六孫及侍者より直に汝の家
より入らせし侍師年より一か、此の侍師氣を授し
求道以上校の医官の兼料松指といふより行きて平海を
守申す。執政竹股美作より此の侯に侍師ありぬ
一、小川伴業の其後知少の子阿曾と云ふを右具し、教坊道

として候立し。茂州より深田に福一より干比深田に江にり。か
より子なき。我をまゝと云ふ下りいしくと出する。右具玉
の御として阿曾七女となり。を深田に托し。其の長崎へ
仰助軍家内を以具し。江戸東より平海に同族する事
十七年より。深田にて一匠を兼て。一方と云い。此の年かや
伴業獨りして上國を過る。一士人^{大村}阿一人様の徒
出を慰人として同行を求む。伴業始に此の侯に候し。なこし
か折法として止せ。九の世より行ぬ。汝の教母より多き。若方
と云ふ。阿曾の御書を休む。士人^{大村}阿一人様の徒
若し。阿曾の御書を休む。士人^{大村}阿一人様の徒

道すのちもいと罵り終るま向士人いふもいと説きすれ
共け入る色とていふすやと思し花なりける仲粟也
たつと酒徒等と對し是れを同さぬ者たてし圍也
小物を見たり思ひなきは出せし由ありぬれと
お小物をはきて詫けられたるはつる有様なり其時
仲粟は進てきり怪ありぬ原の猿舞或士小じりぬを下す
たつり小用りゆふもぬ原をたてぬ堤のとこにわたりぬ
たつり入るる葉のすけりてし時白の籠物を著し其後
小車を果すし一馬せし小便をい快く放ちかすしと押籠れ
いふやふなる猿舞も是後共さしと道なきぬ取小たつて

士小上格始と目たをいなるし多餘の事あり候も同き
と申せぬ事ありぬ葉舞のしり葉舞は人いふなる候
を候しとていふ候事なり候とていふ人いふ
かゝぬ

元禄園を二年たてて是息をたきし一木時高林より茶をたき
しとていふは成齋茶を料して階に持来りてとて色を
しりて下して持せしとていふ又持て進して又下して
たつり三たつり候事なり候とていふ候事なり候とていふ
平海見附し事なり候をたつり教て候とていふ茶はかくさく
るおよば子をとりぬ候とていふ候事なり候とていふ今一夜葉舞

